

奈良女子大学附属中等教育学校所蔵『御大禮文庫目録』について

松田 泰代

はじめに 研究の背景

奈良女子大学附属中等教育学校所蔵『御大禮文庫目録』の調査結果とともに、そこからの分析および考察を展開する。

筆者は奈良女子大学の附属校園（旧文学部附属幼稚園から旧文学部附属高等学校）の卒業生であり、恩師より依頼を受けて、平成二五年より附属小学校および附属中等教育学校の歴史公文書に携わっていた。附属中等教育学校の文書リスト化をおこなっている際に、今回採り上げる『御大禮文庫目録』を目にしていた。後日、本誌『書物・出版と社会変容』の第一六号（二〇一四）に掲載さ

れた論文、磯部敦「ほか」著「大礼記念文庫の書籍文化環境」（以下、「磯部論文」）を拝読して、この目録について紹介することも意味があると考え、調査結果を報告する。

1. 附属中等教育学校所蔵歴史公文書について

附属中等教育学校は、奈良女子高等師範学校附属高等女学校（明治四四年創設）および附属実科高等女学校（大正五年創設）の文書を継承している。当時、職員室は附属小学校と一緒に設置⁽¹⁾されていたので、附属実科高等女学校の文書が附属小学校所蔵の文書⁽²⁾に混じっている事例もある。

附属中等教育学校で所蔵している歴史的公文書は、完

全網羅した状態で保存されているわけではないが、『明治四五年度主事月報』に始まり、さまざまな日誌や短冊帳形式の学籍簿など約八〇〇点がある。日本学校教育史を考えるにあたって、有益なサンプルを有している。特筆すべきは、昭和の学園紛争の記録が配布されたビラまで収集し、『学園紛争関係ファイル』（三冊）として保存されていることである。全国に大学紛争の記録は残っていても、高等学校で繰り広げられた学園紛争の状況を伝える史料は珍しく、貴重であろう。また、附属中学校における制服廃止への生徒会活動記録など生徒による民主的な自治の過程が伺える日本では特異な事例の詳細な記録がある。心から生徒を受け止め導く教師陣の教育者としての懐の深さ、寛容さ、因習にとらわれない姿勢が窺える貴重な史料群である。

明治・大正の史料は紙質も比較的良く、資料保存のプログラムを策定し、順次計画を実行すればよいが、昭和期の史料は紙質も悪く酸性紙であり、青焼きやガリ版刷りのものも多く、喫緊の保存対策が必要である。一刻も早い財政措置が望まれる。

現有文書⁽³⁾にあたらない歴史的公文書と判断する図書に

関する史料は、左記のとおりである。なお、「記載なし」という表現は、日本目録規則における記述の情報源に時間情報記載がなかったという意味である。

明治四四年九月 生徒文庫圖書目録⁽⁴⁾

大正四年四月 圖書部門別目録⁽⁵⁾

(記載なし) 御大禮文庫目録⁽⁶⁾

大正十三年一月 御成婚記念文庫⁽⁷⁾

(記載なし) 校友會圖書目録(全二冊)⁽⁸⁾

(記載なし) 校友會圖書原簿⁽⁹⁾

昭和十年四月起 雑誌受付簿⁽¹⁰⁾

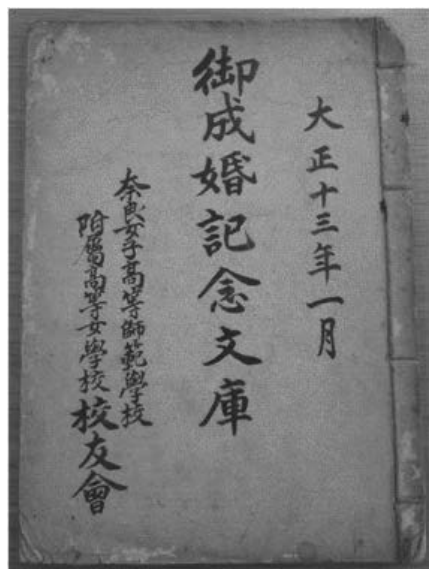
昭和十八年四月 圖書購入簿⁽¹¹⁾

(記載なし) 金銭出納簿⁽¹²⁾

2. 『御大禮文庫目録』について

附属中等教育学校が所蔵している『御大禮文庫目録』は、その表記どおり「記念」という言葉は含まれていない。

本文の記載内容「購入年月日」を見る限り、大正九年



【図2】『御成婚記念文庫』表紙



【図1】『御大禮文庫目録』表紙

九月九日以前に成立していることはあきらかであるので、ここでいう「御大禮」とは昭和天皇ではなく、大正天皇の「即位ノ礼及大嘗祭」すなわち大礼の儀をさしていると判断できる。磯部論文に、大正大礼と奈良女子高等師範学校（以下、「奈良女高師」）における記念行事に関する紹介⁽¹³⁾がなされているので、この論文では割愛する。詳細については磯部論文を参照されたい。

この目録には、「記念」という言葉は含まれていないが、奈良女高師で設けられた「記念文庫」と同質のものと推察する。

第一に、僅少ではあるが文庫の蔵書冊数に増加が見られ、閉じて固定した文庫ではなく、成長している文庫ととらえられることである。これは、磯部論文で奈良女高師評議会記録から「関連図書を「暫次ニ追集」していく」姿勢⁽¹⁴⁾が確認されているが、同一の姿勢がこの目録でも窺える。

第二に、文庫の蔵書構成である。磯部論文で奈良女高師の記念文庫の選書基準「一、皇位皇統ニ関スルモノ」「二、聖徳ニ関スルモノ」「三、臣民ノ勤王ニ関スルモノ」が紹介⁽¹⁵⁾されており、これと性質を同じくする。

附属中等教育学校所蔵『御成婚記念文庫』の蔵書構成とはあきらかに違う。この目録には、二六〇点⁽⁶⁾の書名が記載されている。その内容は、哲学、宗教、思想、歴史、法律、経済、社会、自然科学、工学、芸術、文学と広範囲の分野のものが含まれており、大札記念の蔵書構成とは趣が全く違うものとなっている。ちなみに、最初のものは大正一三年二月一日に備え付けられ、同年四月一日、五月二八日と次々に図書が加えられ、昭和一四年五月二日まで追集の記録がある。寄贈は数点確認できるが、多くは購入と記載されており、校友会費での購入が中心だったと思われる。『御大禮文庫目録』と同様、何度も蔵書点検をおこなった痕跡があり、随所に鉛筆での書き込みがある。その書き込みの一例に「学校ヨリ借用力へス」と欄外に記入され、消し込みの線が引かれているものが数点ある。

第三に、大正大札の行事においては、附属校園も含めてすすめられていたことである。附属校園も含めて、奈良女高師において大正大札の奉祝式おこなわれたこと⁽¹⁷⁾を磯部論文はあきらかにしている。「挙校一致体制」の流れからも、附属校に奈良女高師と同じ形式で大札記念文庫

が開設されていてもおかしくはないと考える。

よって、この『御大禮文庫目録』は大正天皇の大札記念事業の一環として開設された文庫の目録として、後日、大正九年九月九日以前に作成されたものと考ええる。

(1) 『御大禮文庫目録』の特徴

市販の用紙を袋綴じにして、厚紙で表紙を付け、四つ目綴じにした和装本の形態である。文庫の蔵書が増加することを前提に余白用紙が準備されている。用紙は一種類で、あとから記録した用紙を集めて綴じたのではなく、最初から帳簿として和綴じにして準備されたものと判断できる。用紙は薄手の楮紙で青のインクで罫線が印刷されており、欄外の左下に「(従印) 奈良梅田特製」と同じインクで印字されている。一枚あたり二四行である。

記録項目は、当初は「番号」「著者名」「書名」「冊数」「購入年月日」と備考欄が用意されていた。昭和四年一〇月二八日の記録から、「部数」「冊数」という概念が導入され、新しい欄が作られた。

「番号」は、基本は連番でふられているが、二箇所乱

れている箇所がある。一箇所は、一二〇が一二一に改め

られ、次に一二〇、一二二と並び、次に一二一が再度記載され、後で重複していることが判明したため、波線の消し込みがなされている。二箇所目は、一三一が一三六に訂正され、次に一三二、一三三と並び、次に一三一が記録され、一三四、一三五と並び、一三六が七に訂正され、一三八と続いていく。両箇所とも欠番はないのでこの番号を使って点数を確認することは可能である。

ここでは、「タイトル数」ではなく「点数」という表現を採用している。セットで受入された場合は、一番号で付番される。しかし、別れて受入れされた場合は、別番号が付与されることになる。同じタイトルでも別カウン

【事例二】

五九 碧瑠璃園乃木大将 上下 二

【事例二】

一一五 溝口白羊 東宮御渡欧記 坤一

大正一〇・一〇・一三 校友會購入

一一六 溝口白羊 東宮御渡欧記 乾一

大正一〇・一〇・一九 校友會購入

この目録には、一五六点、二二一冊の図書の記録がある。経年変化をまとめた表が【表一】年度別受入点数および冊数⁽⁸⁾である。一九二三年度から一九二五年度まで受入点数は〇点であった。そして、奈良女高師で受入が確認できなかった一九二八年度から一九三〇年度のう

ち一九二八年度および一九二九年度は、五点五冊、十四点十八冊と受入がおこなわれた。

この目録には、図書だけではなく掛図も記録されている。ただし、標本類の記載はない。市販の資料だけではなく、独自に編集された可能性がある資料⁽¹⁹⁾も含まれている。新聞記事の貼り交ぜ帳（スクラップブック）と推測する資料である。

【事例三】

一四〇 讀賣新聞社 讀賣新聞御大禮記事九月十

月、十一月 一 二 昭和四・一

〇・二八寄贈

一四一 國民新聞社 國民新聞御大禮記事九月十

【表1】 年度別受入点数および冊数

	奈良女高師大礼記念文庫			『御大禮文庫目録』		『御成婚記念文庫』	
	磯部論文表2	奈良女高師修正点数	奈良女高師冊数	附高女点数	附高女冊数	附高女点数	附高女冊数
1915以前	112	112	232				
1916	102	102	213				
1917	25	25	28				
1918	19	18	23				
1919	18	18	18	108	163		
1920	4	4	4	4	5		
1921	15	15	24	7	8		
1922	11	11	13	3	4		
1923	9	9	12	0	0	11	21
1924	6	6	8	0	0	52	145
1925	2	2	2	0	0	36	61
1926	2	2	2	2	2	14	37
1927	2	2	2	2	2	2	8
1928	0	0	0	0	5	8	17
1929	0	0	0	14	18	0	0
1930	0	0	0	0	0	0	0
1931	2	2	2	2	2	0	0
1932	3	3	[3]	1	1	0	0
1933	2	2	2	1	1	0	0
1934	3	3	3	2	2	26	26
1935	3	3	4	0	0	52	52
1936	5	5	7	0	0	13	13
1937	4	4	4	2	2	6	6
1938	5	5	5			5	5
1939	10	10	12			1	1
1940	6	6	7				
1941	1	2	3				
1942	9	10	15				
1943	2	2	2				
不明	18	18	23	3	6	28	38
計	400	401	673	156	221	254	430

月、十一月 一 二 昭和四・一
 ○・二八寄贈
 一四二 奈良新報社 奈良新報御大禮記事九月十月
 十一月 一 一 昭和四・一
 ○・二八寄贈

「購入年月日」は一〇八番までは記録がなく、一〇九番に「大正・九・九」と記録があり、一一〇番に「大正・十二・二三」と記入後、年情報として「九」が書き込みされていて、「大正・九・九」は大正九年九月九日と考えられる⁽²⁰⁾。

備考欄の記録は空欄であったり、「購入」「校友会購入」「寄贈」の書き込みが部分的になされていたりする。校友会購入であっても、購入とだけ記載されている事例もある。

奈良女高師の運営方針であるが、一九一五年六月二二日の教員会議の記録では「職員生徒各醸金ヲナシ、之ニ学校ヨリ多少ノ補助ヲナシ、以テ記念文庫ヲ作り、御大禮ヲ永久ニ記念セントスルコト評議會ニテ決定セシ旨校長ヨリ御話アリ⁽²¹⁾」と記されている。附属高等女学校にお

いても校友会で購入している理由が見出せよう。

附属中等教育学校が所蔵している『金銭出納簿』は校友会の図書関連の予算とその執行状況が記録されており、大正八年度から昭和十六年度の三月十四日まで通覧できる。三月十四日で記録は終わっており、その年度の決算はおこなわれずに次の帳簿に引き継がれている。

この『金銭出納帳』で散見した一つの事例を『御大禮文庫目録』の事例とともに次に挙げておく。『金銭出納帳』は支払簿なので、この目録の「購入年月日」とは支払日付が少々かけ離れている特徴が見られる。

【事例四】

一五三 田中光顯 聖上御聖徳録⁽²⁾ 一 一
昭九・四・二〇 購入

『金銭出納帳』*横書きの市販台帳を使用

〔昭和〕9年4月13日 聖上御聖徳録（申込金）5円
〔昭和〕9年5月16日 聖上御聖徳録 一部代金残金
10円

この目録は、筆跡により一〇八番までは同一人物によりまとめて記録されたと窺える。一〇九番からはあきらかに書写道具も筆跡も複数あるように見える。

ペンで記載された項目以外に、鉛筆での記録がある。蔵書点検を複数回行い、その結果を鉛筆で書き込んでいる。少なくとも次にあげた期間にそれぞれ蔵書点検をおこなったと考えられる。

大正十一年一月二日から大正十五年四月二十八日の間

(一九二二・一二・八―一九二六・四・二八)

大正十五年五月三一日から昭和二年五月二十七日の間

(一九二六・五・三一―一九二七・五・二七)

昭和二年一月四日から昭和三年四月一〇日の間

(一九二七・一一・四―一九二八・四・一〇)

昭和四年九月二日から一〇月二十八日の間

(一九二九・九・二―一〇・二八)

(2) 『御大禮文庫目録』の書籍内容

【表2】として、論末にこの目録に記載されていた内容の一覧を掲載しておく。

大正の大礼を記念してつくられた文庫ではあるが、その目的は天皇主体の体制の存続・強化のために、その基盤となる精神を育てる、すなわち新渡戸稲造が述べるところの「皇室に対する敬虔の念も増し、報国の観念も深くなつて来る」⁽²³⁾ ための装置として教育機関の図書館に、その機関の構成員の意思とは関係なく、⁽²⁴⁾ 政策として設置された。

附属高等女学校の『御大禮文庫目録』はその蔵書構成から奈良女高師の選書基準を踏襲していたと考えられる。大正の大礼を記念した文庫であるが、その本来の目的から鑑みても大正天皇の大礼だけを収集するものではない。【表2】の購入年月日の値が「昭和三年」「昭和四年」の書名に注目すればわかるように、昭和の大礼に関する資料も収集されていることがわかる。先にあげた【事例三】も昭和の大礼の資料である。

たとえば、『昭和御大禮 官報號外』（表2 151番）は附属高等女学校としては昭和三年十二月一日に受入れているが、後日、昭和七年四月一六日から昭和八年一月二〇日の間に、この文庫の蔵書として組み込まれたことが窺える。あらたに昭和の大礼文庫をつくるのではな

く、本来の目的にしたがつて、「御大礼文庫」の資料として収集をおこなっていたと考えられる。

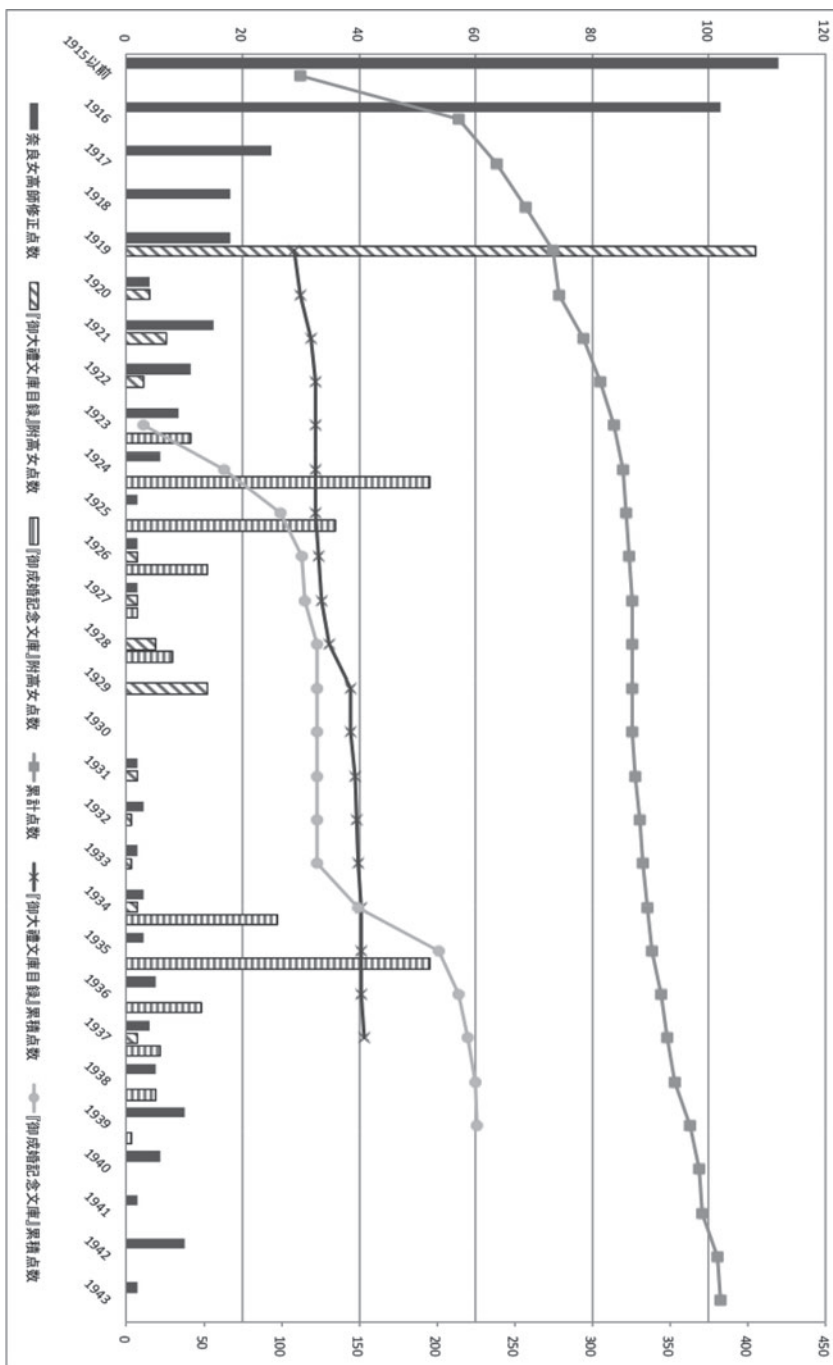
3. 磯部論文についての考察

（1）蔵書冊数における増減の視点

磯部論文では、図書原簿の照合から得られた数値では点数の増加を確認できるが、『奈良女子高等師範学校一覽』で公開されている統計数値では、一九三三年六月の調査時から一九四四年度まで増加がなく、総計四五九点であるという指摘⁽²⁵⁾がなされている。

図書は収集するだけでなく、破損本や欠本を廃棄処理する可能性がある。あらたに二冊の図書が増えたとしても、台帳上で二冊の図書が廃棄処理なされれば、蔵書冊数に変化はない。図書原簿を追いかけただけでは確認できない問題である。厳密には廃棄手続きをおこなった書類と増減冊数を管理している帳簿との照合が必要であろう。ただし、今回の事例の場合は他の要因が作用している可能性もあるので、冊数が合っていないという問題の提

【図3】年度別受入点数推移と累積点数
(受入年度不明本は除く)



起は必要であろう。

(2) U字型曲線

磯部論文では2箇所にわたってU字曲線について述べられている。

【表2】をふたたび見てみると、二点ほどの大きな特徴が指摘できる。一つは、数値の差は大きいけれどもU字型の形状をとっている点である。もう一つは、これに関して一九二八（昭和三）年度から一九三〇年度の点数がゼロであるという点だ。⁽²⁶⁾

もう一箇所は、

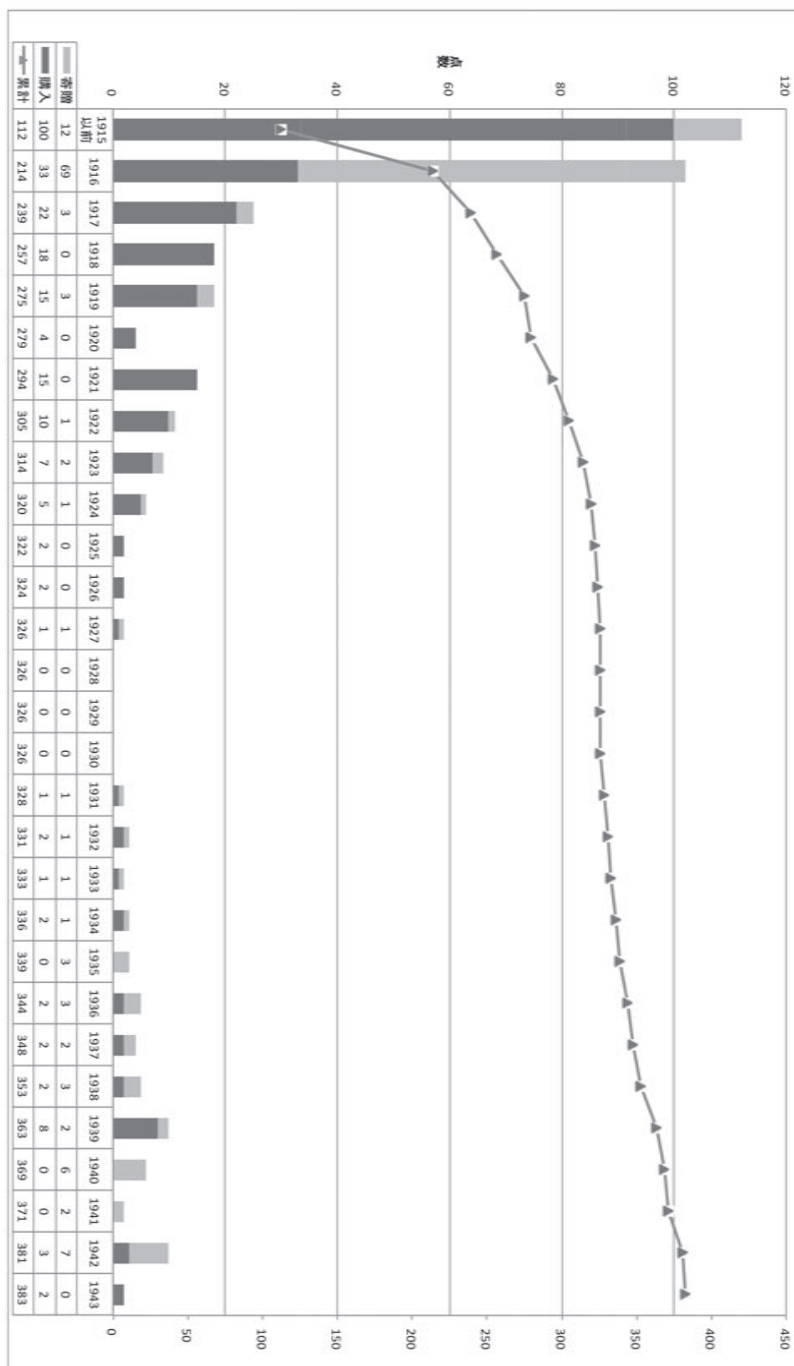
ここであらためて大礼記念文庫への図書別置状況がU字型であったことを思い返しておきたい（【表2】参照）。一九二七（昭和二）年度に二点ほど収められて一九三〇年度まではゼロ進行、それ以後は毎年点数ほど別置されていた。⁽²⁷⁾

の部分である。このあと磯部論文では三つの論が展開する。その前に、まずはU字曲線について考察してみる。はたして、ほんとうにU字曲線と解釈できる曲線であるか。最後に不明本の値一八点がプロットされているため少々錯覚をおこしやすい棒グラフが作成されていると考える。

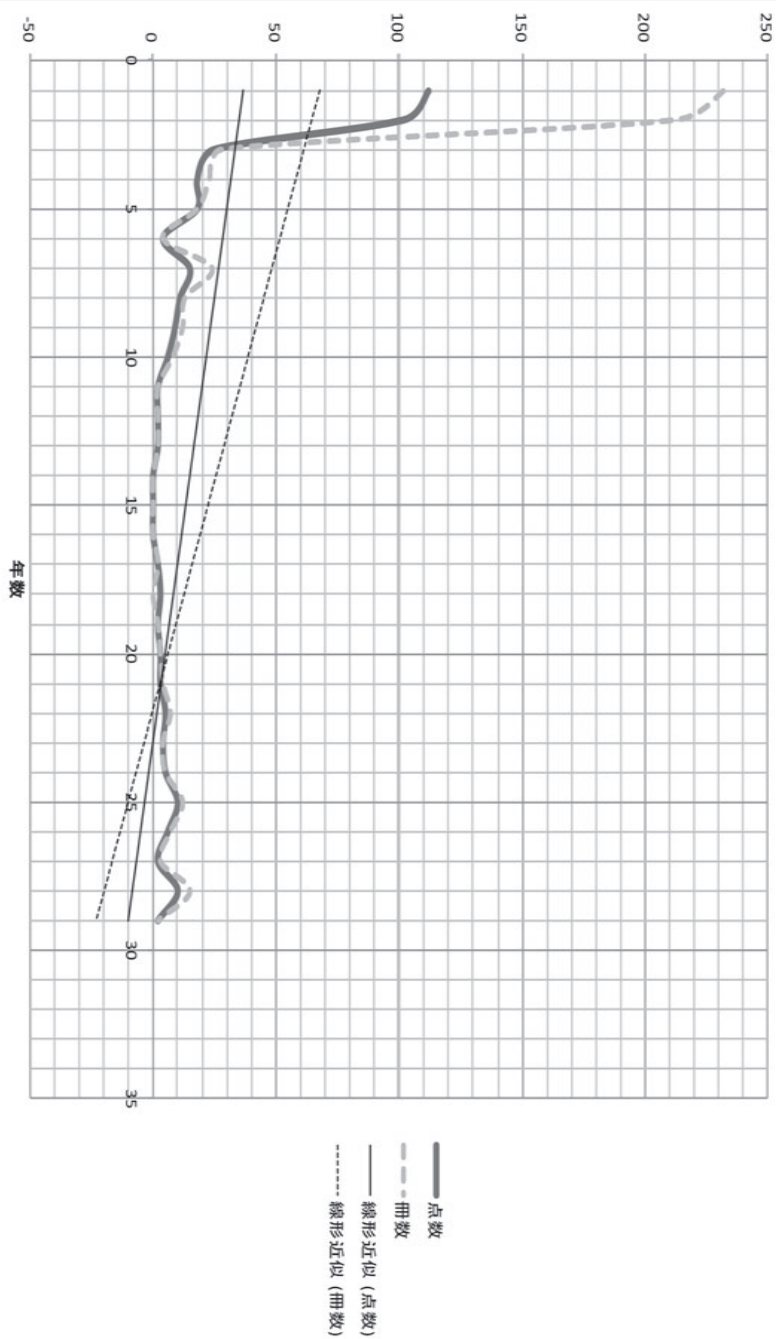
そこで、この不明本を取り除いた受入点数をあらわす棒グラフと累計をあらわす線グラフの複合図【図4】を作図してみた。また受入点数は購入と寄贈の点数を積み上げた表示で棒グラフを作成した。左側の軸ラベルは年度別の受入点数で、右側の軸ラベルは累計点数をあらわす。もし、受入点数がU字型で伸びているのなら、累計の曲線は一九三一年以降、上へ反るような形で伸びて行くはずである。しかし、なだらかな曲線である。

受入年のわからない不明本一八点があること、『奈良女子高等師範学校一覧』で公開されている統計数値では四九五点が公表されており九五点確認できていないこと、そして図書原簿および明細簿からデータをおこしているので別置された日付ではなく受入年であることを再度確

【図4】奈良女高師 大礼記念文庫点数推移
(原簿記入日不明本18点は除く)



【図5】受入点数と冊数の経年変化



認しておく。これらの点数を合わせると、一一三点の不確定要素が存在している。○冊や一冊、二冊、三冊といったレベルの数値は誤差の範疇ではないかと考える。受入点数と受入冊数の経年変化を線グラフで捉えてみると【図5】のようになる。U字型の解釈からくる視点をもう一度再検討する余地があるのではないかと考える。

(3) 三つの視点

磯部論文の視点⁽²⁸⁾を箇条書きにすると次のとおりである。

その一 大正記念文庫は大正大礼を記念するもの

理由 大正大礼以降の減少傾向

昭和の大礼期のゼロ進行から明らか

小結 形式的に存続していただけ

その二 昭和期以降も選書基準の踏襲

その三 一九三九年度頃から積極的に購入・別置

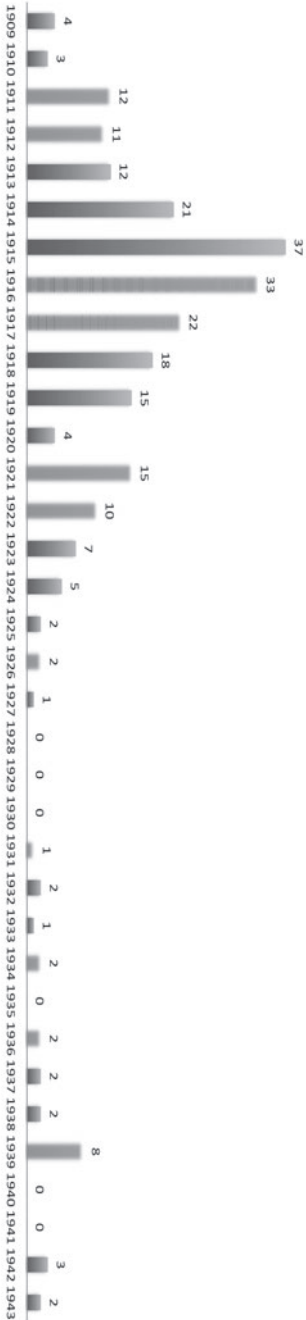
分析方法 「昭和期以降の記念文庫図書から寄贈図書を除いてみれば明らか」

小結 形骸化していたものをあらためて〈再利用〉

しはじめた

問題提起 なぜ一九三九年度以降からか

【図6】購入図書の推移



その一の視点とその結論、およびその二の視点に関して異議はない。まず、大札記念文庫は大正の大札を記念して設置されたからである。そして、その受入点数および冊数の経年変化は緩やかな減衰傾向を示している（【図4】参照）。とくに積極的な収集活動は見られず、「関連図書を「暫次二追集」していく」という方針の縛りで細々と継続しているだけに見える。

寄贈をのぞいた購入図書の受入点数の推移を追ったグラフを一九一五年以前の部分を受入年で分解して作図してみると【図6】のようになる。大正大札を記念して文庫が作られる以前も、記念文庫の選書基準に合致するような主題をもつ図書がある程度の点数購入されていたことがわかる。そして、一九二五年以降、特異点の一九三九年度を除けば、〇冊から三冊の間を推移していることもわかる。

よって、磯部論文の三番目の視点および分析、結論は再考の余地があると考ええる。むしろ、特異点一九三九年度について考察⁽²⁹⁾をおこなうべきではないかと考える。

また、視点その一の理由は根拠が乏しいと考える。その理由として昭和の大札期の受入点数が〇点であることが

挙げられているが、では奈良女高師において、昭和の大札を記念する文庫の創設やそれに伴う図書の収集活動がおこなわれた形跡があるのであるのか。昭和の大札の記念事業が図書収集に打撃をあたえるほど繰り広げられたのであろうか。附属高等女学校では昭和の大札期には昭和の大札の関連図書が収集されている。むしろ、この三年間のゼ口進行は、他の要因によるものとは考えられないのであろうか。予算の問題、あるいは事務上の些細な原因などにその解はないのだろうか。

4. 『御大禮文庫目録』と『御成婚記念文庫』

『御大禮文庫目録』と『御成婚記念文庫』の決定的な違いはその蔵書構成にある。『御成婚記念文庫』は生きた使われ方をしたと考えられる品揃えであり、現在見ていても手に取って読みたくなるような蔵書となっていることである。例えば、一頁目から『戦争と平和』、中村正樹『アッシジの聖フランチェスコ』、世界とのつながりを考える意味で『本邦輸出入品詳解』、『衛生百話』など散見できる。『アッシジの聖フランチェスコ』が入っている見

識の高さを評価したい。ほかにも紹介しきれないほどの品揃えで、文学作品、美術書、科学書も豊富で生徒が読みたくなる、見識ある教師が生徒に読ませたい品揃えになっていると考える。思想的にどちらかに振れているということはなく、主題分類的にもかたよりなく収集されている。津田左右吉『我が国民思想の研究』や美濃部達吉『行政法』の著作も収集されているし、西田幾多郎『哲学の根本的問題』、田辺元『哲学通論』や寺田寅彦『地球物理学』、鈴木梅太郎『栄養化学』などバランスよく収集されている。他にも散見するままに記すと吉田東伍、和田万吉、和辻哲郎、暉峻義等、山田孝雄、波多野精一など数えきれない。『御成婚記念文庫』の内容紹介については是非、別の機会をもちたい。この文庫の蔵書内容は、「大正デモクラシー」という言葉に象徴される時代背景も影響しているのかもしれない。

【表1】および【図3】をみると、『御大禮文庫目録』は一九三七年度（最後の記録は昭和二年一〇月二五日）で、『御成婚記念文庫』は一九三九年度（最後の記録は昭和一年五月二日）でそれぞれの文庫の成長が止まっている。

そして、面白い動きは御成婚記念文庫が創設されると『御大禮文庫目録』は三年間、蔵書の成長が止まることである。御成婚記念文庫は校友会費で運営されている文庫であり、学校の予算で購入されているものではない。対して、御大礼文庫は学校の予算でも購入可能な文庫である。ただたんに、その時期は選書基準にかなう図書の出版や寄贈がなかったかもしれないが、奈良女高師では、九点（内寄贈二点）、六点（内寄贈一点）、二点と受入がされている。

ひとつの可能性は、表向きの理由として御成婚記念文庫の基盤を整えるため、三年間は御大礼文庫を収集するためのすべての能力、すなわち財政的・人的能力を御成婚記念文庫にまわすという方針がたてられたと考えられることである。もうひとつの可能性は、事務上の些細な原因である。「表向きの」という穿った表現をしているのは、その後、一九二八年度の五点、一九二九年度の一四点（内寄贈一〇点）の特異点（昭和六礼の関係資料と大正天皇の崩御関係資料が多い）をのぞき緩やかな減衰傾向にあり、収集能力が回復した兆しは見えず、ただ形式的に存続させていたように見えるからである。

一方、御成婚記念文庫も一九二八年度まで順調な増加傾向にあるが、一九二九から五年間、見かけは〇点となる。今後の課題でもあるのだが、『御成婚記念文庫』目録は、タイトル数のカウントを重視しており、固有のタイトルを持つ図書は、付番されて記録されるのだが、叢書名に巻数がつくものは、以前の記録の部分に巻数を記録する方式で、正確な受入年月日状況については、今後『金銭出納簿』と照合していかねばわからない。しかし、タイトル点数の推移を見るのには有効であり、点数の推移より低い値をとることは想像できる。

おわりに

昨今、大学での授業方法が見直され、一方向的な知識伝達を目指す講義式授業からアサインメント(assignment)方式の授業、すなわち自由探求型演習やワークシヨップ型演習といったものや反転授業が提唱され、導入されている。アメリカの大学の授業方法を新しく導入したという流れで書かれている図書もある。

しかし、学校教育の現場では、大正自由主義教育の典

型として有名な奈良女高師の附属小学校で木下竹次によって提唱された自立的学習方法が知られており、アサインメント方式や反転方式の授業はおこなわれていたといえる。これは「奈良の学習法」と呼ばれている学習方法で、「独自学習→相互学習→独自学習」と進む。独自学習のための「特設学習時間」というものが設けられており、次に相互学習のための「合科学習」に進む。独自学習では、学習者は「目的、方法を心得て学習する」「独自で研究し、独自に考查して」「自験自証の方法を心得て論証し考查もする」というような自己評価をも含めた学習方法を習得することが要求され、「各自の独自学習の結果を持参して独立の意志を持って」相互学習に参加するということである。⁽³⁰⁾

木下は一九二三年に『学習原論』、『学習各論』を出版し、木下たちが実践して来たこの学習法が全国に紹介された。「奈良女子高等師範学校附属小学校における大正一年の参観者は一〇、六八四名、大正一二年の参観者は二〇、五一二名、大正一三年の参観者は二一、五三九名にも及んだ」⁽³¹⁾という。

松本博史によると

木下が学び、教師となった時代は、今世紀初頭から国家主導の形で進められた教育の画一化や知識注入主義、形式主義的弊害が顕著になり、それらを克服しようとする動きが顕在化して来た時代であった。

「子どもから(om Kinde aus)」の標語の下に世界的に「新教育運動」の高揚した時代であり、我国においても、樋口勘次郎の活動主義、木下の恩師谷本富等の自活主義が唱えられた時代と一致している。後に述べる木下の独自学習は一斉授業の形式化・硬直化の改善をめざしたタルトン・プラン・ウイネトカ・プランの日本版といえるだろう。

と述べている。⁽³²⁾

このような教育が進められている中、「職員生徒各醸金ヲナシ、之二学校ヨリ多少ノ補助ヲナシ、以テ記念文庫ヲ作り、御大禮ヲ永久ニ記念セントスルコト評議會ニテ決定セシ旨校長ヨリ御話アリ」⁽³³⁾と上意下達の命令は、現場の教師たちにどのようなとらえられたであろうか。

昔、都のあった土地では、その当時は常に多くの情報

が行き交い、最新の思想や宗教、芸術といったあらゆる流行が集まっており、人びとも感化され先進的な柔軟な思考力を有しており、その記憶がかけらとして残っているように感じる。文学的な表現をかりるならば、「精神においては自由な風が流れていた」とでも表現できようか。

都の人がもつとも大切としたことは、時の権力者の意向を尊重し重視し、公の発言や行動をした。つまり、「建前」である。しかし、その実、「本音」というものを持っている。相手の意向を尊重しつつ、相手の体面を傷つけることなく、本音を公に発言することなく発動する。これが都で生活する人の知恵であろう。

御大礼文庫を設置しつつ、時の流れに乗じて、御成婚記念文庫を新たに設置し、発展的解消に持つて行ったのではないだろうか。このことは、附属高等女学校『御成婚記念文庫』の今後の研究を進めれば解明できるかもしれないし、本音は表層には出さないものであるから証明はできない類いのものかとも考える。今後の課題は、『御成婚記念文庫』の紹介と『金銭出納簿』の分析結果、近代期における学校図書館の蔵書、大きなテーマは明治・

大正・昭和の本の値段と物価、日本近代における国家予算の文教費と図書館運営である。大きなテーマはいつになるか判らないが、是非、取り組みたい課題である。

【註】

(1) 附属小学校の第二代目主事木下竹次（一九一九―一九四〇在職）は、奈良女子高等師範学校教授兼附属高等女学校・附属実科高等女学校の教員も兼ねていた。

(2) 附属小学校の保存史料目録は、創立百周年事業として、左記の書籍で公開されている。

奈良女子大学附属小学校創立百周年記念誌編集係編『わが校百年の教育』奈良女子大学附属小学校創立百周年記念事業実行委員会 二〇一二・一二

(3) 現在の業務を遂行する際に必要となる文書『図書台帳』

『図書原簿』（国費・寄贈本・教官個人研究費購入本）『供用簿』『PTA図書原簿』など戦後の作成された台帳がある。附属学校園の場合、大学からの予算で購入される図書とPTA会費で購入される図書がある。

(4) 和装 表紙一部剥落あり。用紙市販 数種類あり。

(5) 和装 表紙一部剥落あり。用紙特注 版心「圖書目録用紙 奈良女子高等師範学校附属高等女学校」。用紙に「印

刷 奈良新明社」とあり。

(6) 和装 用紙市販 「從印 奈良梅田特製」

(7) 表紙の責任表示 「奈良女子高等師範学校附属高等女学校校友會」

和装 用紙市販 特に明記なし。

(8) 各表紙に「(其一) 御大禮、修教、國漢、地歴、雜書、法経之部 生徒文庫備付和装」「(其二) 御成婚、外語、數學、理化、博物、美技産、家裁、辞叢之部」とあり。

和装 用紙市販 第一分冊「梅田製」、第二分冊「(因) 奈良 梅田印刷」

(9) 表紙の責任表示 「附属高等女学校第二部」

表紙右肩に「10329 11.3.30 12.3.30 13.3.29 14.4.2」書き込み。その後「木下」の認め印(朱印)あり。蔵書点検に使用されていたと考えられる。「木下」とは、木下竹次と考えられる。木下竹次は附属小学校で、大正新教育を代表する自律的学习や合科学习を特徴とする「奈良の学习法」を推進した。

和装 用紙特注 版心「奈良女子高等師範学校」「附属小学校圖書」「附属實科高等女学校圖書」が混合使用。用紙に「印刷 奈良新明社」とあり。

小口に見出し(別付け)あり。

(10) 和装 用紙は特注 板心「奈良女子高等師範学校」。用紙

に「関西印刷株式会社納」とあり。

- (11) 表紙の責任表示「研修部」

和装 用紙は特注 版心「奈良女子高等師範学校」。用紙に「奈良 明新社」とあり。十枚、別用紙挟み込みあり。版心「奈良女子高等師範学校」。用紙に「西奈⑧ 関西印刷納」とあり。

- (12) 洋装本 図書館用品として市販されている台帳

「大正」八年四月二十四日から昭和十六年三月十四日までの記載あり。図書館の予算や当時の本の価格がわかる史料。

- (13) 磯部敦「ほか」著「大札記念文庫の書籍文化環境」『書物・出版と社会変容』一六号（二〇一四）<http://hdl.handle.net/10086/26511> 二〇一四年一月一三日確認

- (14) 同掲 一〇頁

- (15) 同掲 一二頁

- (16) 行番号は二五七番まで付番されている。しかし、一二五番は空欄、八六番、八七番、八九番、九〇番、九三番、九八番は書名だけは記録されているが、受入れされた形跡無し（部数と価格、備付月日が空欄）、一五四番は五行有り、五点各々別書名。冊数は計四三〇冊

- (17) 前掲「大札記念文庫の書籍文化環境」 一四―一五頁
(18) 奈良女高師大札記念文庫の数値は、前掲「大札記念文庫

の書籍文化環境」の四五―五九頁のデータを基にして算出したものである。一九三二年度の冊数は、データは空欄だが、記入漏れとみなし、1を補いカウントした値なので「」で補記した。

- (19) 書誌情報報を国立情報学研究所や国立国会図書館のデータベース等で調べたが、見当たらなかった。

- (20) 『金銭出納簿』の記録により、大正九年九月六日に一円五十銭の支払がなされたことが確認できる。

- (21) 前掲「大札記念文庫の書籍文化環境」 一一―一二頁
(22) 『聖上御盛徳録』の誤記入と思われる。

- (23) 新渡戸稲造「御大禮の意義を普及せしめよ」『御即位礼画報』四卷（一九一四） 四二―四三頁 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1539704> 二〇一四年一月一三日確認

「斯く云う意味に於いて、御大禮に關する知識を授ける雑誌演説等をやるのは誠に口事である。かう云う事によつてよく其意味を女子供にまでも知らしたいものである」

- (24) 教員會議の記録に「評議會ニテ決定セシ旨校長ヨリ御話アリ」とあることから、構成員によつて自発的に起こった事業ではなく、上意下達の形でおこなわれたと考えられる。前掲「大札記念文庫の書籍文化環境」 一一―一二頁

- (25) 前掲「大礼記念文庫の書籍文化環境」 一〇頁
 (26) 前掲「大礼記念文庫の書籍文化環境」 一一頁
 (27) 前掲「大礼記念文庫の書籍文化環境」 三二頁
 (28) 前掲「大礼記念文庫の書籍文化環境」 三二―三三頁
 (29) 一九三九年度（昭和一四年三月―昭和一五年三月）の受入日を見てみると、一〇月二四日（寄贈）、十一月四日、十二月一八日に各一点計三冊の受入、翌一月二九日（寄贈）一点二冊、二月二一日一点一冊、二月二六日一点二冊、三月五日二点二冊、三月一二日二点二冊である。年度末に集中していること、『勅語衍義』（明治二七年）、『教育勅諭衍義』（寄贈）（明治二八年）、『勅諭衍義』（明治一六年）が三點五冊入っていること、そして出版年の古いものが計四點六冊入っていることが特徴としてあげられる。

(30) この段落は、口頭に寄る伝授、および次の論文を参考にして記述した。

松本博史「奈良女高師附属小学校における数学教育論 一木下竹次の算術学習論―算術における学習法の展開―」『研究紀要』奈良女子大学文学部附属中・高等学校 三四集（一九九三）七七―一二五頁（<http://hdl.handle.net/10935/1998>）二〇一四年一月一二日確認
 松本博史 博論「奈良女子高等師範学校附属小学校における

清水甚吾の算術教育…一九一一（明治四四）年度から一九四〇（昭和一五）年度まで」神戸大学（学博）486（<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/dl/D1003053.pdf>）二〇一四年一月一三日確認

(31) 蜂須賀渉「奈良の学習法」を支える日常的な学習指導『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』一三三号（二〇一〇）二三―三〇頁

(32) 前掲「奈良女高師附属小学校における数学教育論 一木下竹次の算術学習論―算術における学習法の展開―」七七頁

(33) 前掲「大礼記念文庫の書籍文化環境」一一―一二頁

【付記】

奈良女子大学附属中等教育学校の史料調査においては、副校長の吉田隆先生、司書教諭の秋山啓子先生、山本喜洋子先生、学校司書の向井美穂さんには様々な便宜をはかっていただき、大変お世話になった。厚くお礼申し上げます。また、中学・高等学校時代の恩師、元副校長であり元神戸女子大学文学部教授松本博史先生にはさまざまご教示を賜り、特に今後の研究の方向性を示唆していただくなど、大変お世話になった。記して心よりの謝意をあらわすものである。

【表2】『御大禮文庫目錄』内容一覧

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
1	日本歴史地理學會	皇陵		1		
2	列聖全集編纂會	列聖全集		25		
3	太陽	御大禮盛儀		1		
4	婦人画報	皇族画報		1		
5	山口信雄	御大禮画報		1		
6	日本及日本人	郷土光華號		1		
7	御大禮記念普通教育研究會	萬歳仁之巻		5		
8	芳賀矢一	大禮と國民		10		
9		大禮記念御代の光		5		
10		即位式圖		4		
11	清岡長言	御即位禮と大嘗祭		1		
12	新日本	御即位記念大正聖代號		1		
13		伊勢神宮と我國體		1		
14		京都近傍圖		1		
15	坂本辰之助	皇室及皇族		1		
16	渡部審也	明治天皇御一代画史		1		
17	村田勝太郎	舉国哀悼録		1		
18	河野正義	聖靈皇太后御一代記		1		
19	大橋敬笑	勤王家百傑傳		1		
20	豊岡茂夫	大楠小楠		1		
21	山路彌吉	乃木大将		1		
22	横山達三	大将乃木		1		
23	山田孝雄	大日本國體概論		1		
24	植原悦次郎	立憲代議政體論		1		
25	喜田貞吉	帝都		1		
26	太陽	御大禮記念		1		
27	新日本	御大禮記念號		1		
28	池邊義象、今泉定介	御大禮図譜		1		
29	大熊權平	大楠公奮忠事歴		1		
30	深尾幸太郎	御即位記念皇國の礎		1		

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
31	市田幸四郎	御大禮記念寫眞帳		1		
32	山口信雄	御大禮記録		1		
33	坂本辰之助, 箕輪四郎	昭憲皇太后 附 女四書		1		
34	日光明助	皇陵及歴代の事跡		1		
35	棟居喜九馬	新帝勅語と修養		1		
36	福田滋次郎	今上詔勅集		1		
37	阿部鐵眼	安徳天皇御事跡論		1		
38	日本皇學館	歴代皇室と國[臣]民		1		
39	山口[田]孝雄	玉の御聲		1		
40	大谷梁造	橋中佐		1		
41	西内成郷	檀原神宮御祭神記並御由緒記		1		
42	山口信雄	青海[島]戰記		1		
43	關根正直	[即位禮大嘗祭]大典講話		1		
44	柴田勇之助	明治詔勅全集		1		
45	丸山正彦, 植木直一郎	軍國記念曆日史談		1		
46	清岡長吉	通俗大禮講話		1		
47	帝國軍人教育會	今上陛下御即位式寫眞帳		1		
48	佐世保軍人勲功表彰會	日露海戰記		1		
49	喜田貞吉	韓國の併合と國史		1		
50	石田傳吉	二宮先生報徳記傳		1		
51	渡邊霞亭	楠正成		1		
52	吉田東伍	生活と趣味よりみたる日本文明史話		1		
53	河野正義	贈位功臣言行録		1		
54	新堀義	御盛徳		1		
55	芳賀矢一	國民性十論		1		
56	神谷初之助, 野村傳四	教育勅語道話		1		
57	坂本辰之助	明治天皇		1		
58	井上頼因, 有馬祐政	國文中朝事實		1		
59	碧櫻瑠園	乃木大將 上下		2		
60	芳賀矢一	日本人		1		

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
61	熊谷篁堂〔敬太郎〕	日本列女傳		1		
62	島内登志衛	善行大鑑		1		
63	學習院輔仁會	乃木院長記念録		1		
64	[穂積八束講演]	國民道德の要旨		1		
65	大隈重信	國民二十訓		1		
66	岡谷繁實	名将言行録		4		
67	岡谷繁實	續名将言行録		1		
68	坂本辰之助, 箕輪四郎	聖憲皇太后		1		
69	大隈重信	國民讀本		1		
70	阪正臣, 村松今朝太郎	明治勅題歌集		1		
71	櫻井忠温	肉弾		1		
72	大島貞吉	御國自慢		1		
73	萩野由之	日本歴史讀本〔少年日本歴史読本?〕		2		
74	井戸川辰三	〔日露戦役〕殉國志士事跡〔讀〕		1		
75	水野廣徳	此一戦		1		
76	佐藤小吉	神代物語		1		
77	高木敏雄	日本神話物語		1		
78	巖谷小波	少年日露戦史		1		
79	小田内通敏	我が國土		1		
80	成田鋼太郎	佐久間大尉		1		
81	時事新報社	後は昔の記		1		
82	學習院輔仁會	乃木院長記念寫眞帳		1		
83	石井良次郎	日露戦役寫眞帳〔帖：大正三年〕		1		
84	藤田嘉平治	神武天皇二千五百年式年祭記念寫眞帳〔記念帖〕		1		
85	通俗教育普及會	赤穂誠忠録		2		
86	通俗教育普及會	古今義人録		1		
87	通俗教育普及會	古今孝子録		1		
88	帝室博物館	日本帝國美術略史		1		
89	通俗教育普及會	豊公英雄録		1		
90	久米田米斉	蒙古襲来繪詞		1		

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
91	箕輪治三郎	東宮冊立史		1		
92	牛塚虎太郎	立儲要義		1		
93	伊藤痴遊	吉田松陰		1		
94	押川春浪、後藤又男	[怪傑]大隈重信		1		
95	赤堀又次郎	御即位及大嘗祭		1		
96	萩野田之	日本歴史讀本(三種の神器)[少年日本歴史讀本第5編?]		1		
97	横山達三	伯大隈		1		
98	笹川種郎[臨風]	南朝五十七年史		1		
99	楠籙夫	百輯女鑑		1		
100	楠籙夫	百輯女鑑		1		
101	徳富猪一郎	大正の青年と帝國の前途		1		
102	高木斐川	明治大正詔勅集		1		
103	屋代熊太郎	税所教子刀目[傳記文集歌集]		1		
104	柳田友廣	大統歌訓蒙		5		
105	横山健堂	大將東郷		1		
106	石川弘	通俗孝子傳		1		
107	象山先生遺跡表彰會	佐久間象山		1		
108	大隈重信	開國五十年史		2		校友會購入
109	岸田蒔夫	大孝 教育画報特別増刊		2	大正9.9	校友會購入
110	岸田蒔夫	明治神宮		1	大正9.12.23	校友會購入
111	大阪朝日新聞其ノ他	御大禮記事		4		
112	日本評論社	明治神宮記		1	大正10.1.27	校友會購入
113	民友社	明治天皇聖德[奉頌]講演集		1	大正10.3.9	校友會購入
114	末松謙澄	明治向陛下聖德記		1	大正10.9.17	校友會購入
115	溝口白羊	東宮御渡欧記 坤		1	大正10.10.13	校友會購入
116	溝口白羊	東宮御渡欧記 乾		1	大正10.10.19	校友會購入
117	梶谷信平	[幕末勤]天誅組烈士散法[誌]		1	大正10.10.19	校友會購入
118	溝口鉄六	東宮御渡欧記念公報集				
119		皇太子殿下御渡欧記念寫真帳 上・下		2	[大正]10.10.30	校友會購入
120	大阪毎日新聞社	澄宮殿下御作童謡集		1	[大正]11.2.14	校友會購入

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
121	三宅武郎	日本皇太子[史]論		1	[大正]11.2.14	校友会購入
122		皇太子殿下御渡欧記事 上・下		2	[大正]11.6.19	讀賣新聞/大阪朝日新聞綴
121	澄宮殿下	澄宮殿下御作童謡集		1	[大正]11.6.19	校友会購入
123	加藤直士	東宮殿下の御外遊ニ陪従して		1		
124	博文館	太陽増刊皇室の光輝		1	[大正]11.10.2	
125	文部省	明治天皇御集		1	[大正]11.12.8	
126	明治天	明治天皇御大葬寫真帖		1	[大正]15.4.28	
127	宮内省	大正德行録		1	[大正]15.5.31	校友会購入
128	高木八太郎, 小島徳彌	大正天皇御治世史		1	昭和12.5.27	
129	講談社	明治大帝		1	[昭和]12.11.4	寄贈
130	山田孝雄	御即位大嘗宮[祭]大禮通纂		1	昭和13.4.10	購入
136	椎名龍徳	昭憲皇太后宮		1	昭和14.4.30	購入
132	国史校友会	御即位禮と大嘗祭講話		1	昭和14.4.10	購入
133		御大禮掛圖		1	昭和13.6.21	購入
131	三浦周行	大禮眼目		1	昭和13.4.10	購入
134	婦人画報社	婦人画報増刊 御即位御大礼記念皇画報		1	昭和13.10.15	購入
135	朝日新聞社	御大禮写真真帖		1	昭和14.4.10	購入
137	博文館	太陽二月特別号大正天皇奉悼號		1	昭和14.9.21	寄贈
138	朝日新聞社	大阪朝日新聞御大禮記事9月、10月、11月		3	昭和14.10.28	寄贈
139		御大禮画帖		1	昭和14.10.28	寄贈
140	讀賣新聞社	讀賣新聞御大禮記事9月10月、11月		2	昭和14.10.28	寄贈
141	國民新聞社	國民新聞御大禮記事9月10月、11月		2	昭和14.10.28	寄贈
142	奈良新報社	奈良新報御大禮記事9月10月11月		1	昭和14.10.28	寄贈
143		大正天皇御喪画報		1	昭和14.10.28	寄贈
144	朝日新聞社	大阪朝日新聞大正天皇御喪記事		1	昭和14.10.28	寄贈
145	讀賣新聞社	讀賣新聞大正天皇御喪記事		1	昭和14.10.28	寄贈
146	國民新聞社	國民新聞大正天皇御喪記事		1	昭和14.10.28	寄贈
147		昭憲皇太后御歌集		1	昭和14.11.19	購入
148	日野薺	聖上陛下の生物学御研究		1	昭和16.12.12	購入
149	宮内省	昭和の大禮要録		1	昭和16.12.12	購入
150		明治神宮録画史 外紙三枚		1	昭和17.4.16	購入

番号	著者名	書名	部数	冊数	購入年月日	
151		昭和御大禮官報号外	1	1	昭3.12.1	寄贈
152	頒徳会	明治大正今上三帝聖徳録	1	1	昭8.11.20	購入
153	田中光顯	聖上御聖[威]徳録	1	1	昭9.4.20	購入
154		檀原神宮寫眞帖	1	1	昭9.4.20	寄贈
155		秩父宮殿下御慶事奉祝号	1	1	[昭和]12.10.7	
156		御大典賜饌記念誌	1	1	[昭和]12.10.25	

* 書誌事項は可能な限り調査をおこない、転記ミスと思われるものなどは、正しい情報を[]に入れて補記した。

* 121 番は、消し込み痕あり